

あとがき

平成27年9月、安全保障関連法案が可決された。しかし、国民の賛否はほぼ二分している。平成27年9月開催の第48回中央教化研究会議では、このことについて様々な意見を持つ教師が議論を戦わせた。教師一人一人が、それぞれ意見を持ち、討議する場が設けられたということは、健全なことではなかったか。

平成32年、御降誕800年を迎える、ご本尊の前で私たちが唱えるお題目にはどのような祈りをこめたらよいのだろうか……。ふりかえると、現代宗教研究所では、平成21年からこのテーマを追いつけてきたと思う。

人口減少社会の中では、成長戦略を望むことは厳しい状況だが、安易に生き残りの方法を模索するという消極的な姿勢では、多くの寺院は雑草に埋もれてしまうにちがいない。このようなときこそ、わたしたち教師が、そして寺院が、本来あるべき姿とは何かと言うことを、真剣に学び、考えなければならない。

私たちが関わるべきなのに、取りこぼしている魂があることを、無縁社会の実態は突きつけた。一般市民が、伝統教団である日蓮宗に何を求めているのかを、3・11の体験や、宮沢賢治の思想は教えてくれた。ドメスティックな教義と思っていた日蓮教学が、グローバルな展開ができる可能性を、アメリカ仏教は示してくれた。そして激動する歴史の渦中で、日蓮思想にしっかりと根を張って屹立する石橋湛山は、私たちの生き様を厳しく問いかけてくる。

宗祖は『撰時抄』に「心みに法華経のごとく身命もをしまず修行して、此度佛法を心みよ。」と教示されている。困難な時代に向かって、私たちは挑戦しようではないか。

御降誕800年に向かって、「自分に出来ることは何か」を教師全員が改めて問い直し、一歩を踏み出せば、宗祖への真の報恩になるのではなからうか。

この冊子が「日蓮宗の教師として生きる」とはどういう事かを考えるきっかけになることを、心から願っている。

※本誌でご紹介させて頂いた方々は発表当時の肩書を掲載させて頂きました。